

地道な基盤整備 生育守った排水設備 需要多く事業化後手



明きょ排水路にたまった土砂や草を取り除く作業
(2016年7月、芽室町祥栄環境保全組合提供)

昨夏の多雨多湿の条件下で、排水路整備の有効性を指摘する声は多い。ジャガイモなどの根菜類は深刻な滞水で腐りも出たが、壊滅的な被害は免れた。十勝地区農協組合長会の有塚利宣会長は「市町村が基盤整備事業を農政の重点に置いてきた結果」と評価する。

排水対策や区画整理といった基盤整備事業は、品種や技術の開発と並んで、十勝農業の生産性を大きく向上させてきた。

終了済みは2割

畑の排水を高める手法の一つが暗きょ排水工事。深さ90センチに合成樹脂の管と砂利を入れ、透水性を確保する。暗きょに入った水は、明きょ排水路を経て川に流れ込む。湿害を受けて十勝総合振興局が昨年8月上旬、豆の畑で行った調査では、「暗きょ排水が未整備の畑は生育不良が見られ、整備済みと明らかな差があった」との結果が出た。

十勝管内は湿性土壌が広く分布して、耕地面積のうち45%で暗きょ排水が必要とされる。ただ、整備が終わったのは2014年度時点で2割にとどまる。道総研中央農業試験場のデータ（12年度）だと、整備率は土幌町が5割

を超す一方、畑作地帯の音更町や中札内村でも10%台となっている。

予算がピーク時の3分の1に減り、需要に工事が追いついていないのが一因。同振興局調整課は「昨年の大雨で基盤整備の機運が高まり、要望はさらに増えている」とする。道営事業に比べて農家負担は大きいものの、市町村営の事業への関心も高まっている。

農家が自ら管理

一方、記録的な雨は排水路の維持管理にも教訓を残した。管の上部が開いた明きょ排水路は、草木が茂り土砂がたまると流れが悪くなる。昨年の台風後は、明きょから水があふれ出し、畑に流れ込むケースも起きた。

排水路の床ざらいを行政に頼んでも、市町村には予算が十分になく、順番待ちしているのが実態。その中で農家による組織が、国の事業を使い自主的に維持管理に取り組んでいる地域もある。

芽室町北部の祥栄地区は、湿け地で早くから排水路が整備されたが、管理が課題だった。そこで8年前に祥栄環境保全組合を組織し、農家48戸が毎年、合同で排水路周辺の草刈りや重機を使った床ざらいを行っている。組合長の児玉康博さん（54）は「農作業を優先したいと賛否両論はあったが、徐々に必要性が浸透した。いくら管路があっても機能しなければ効果は出ない」と語る。昨年は冠水も起きたが、児玉さんは「手を入れなければ被害はもっと広がっていただろう」と感じている。

民間では排水設備のコストを下げる研究も始まっている。ドローンで上空から土の状態を把握する技術を応用すれば、畑ごとの水はけの性質が分かり、暗きょの敷設にも役立てられる。ズコーシャ総合科学研究所（帯広）の丹羽勝久所長は「排水の悪い所が分かれば、効果的で効率的な基盤整備ができる」と話す。

地球温暖化で十勝農業への脅威は冷害から湿害に移りつつある。先人たちのようにどう克服していくか、官民挙げた対策が求められている。